

『大阪ことば事典』のアクセント

著者	中井 幸比古
雑誌名	神戸外大論叢
巻	58
号	2
ページ	21-41
発行年	2007-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000839/



『大阪ことば事典』のアクセント

中 井 幸比古

1. はじめに

『大阪ことば事典』（最初の版は『大阪方言事典』。以下両者をまとめて「本書」）には、1898年・大阪生まれの編者の内省によって、大阪アクセント（以下「ア」）が記載されており、ア資料としても有用である。本書の方言事典としての全般的な評価につき、例えば和田（1984）pp.322-323・真田（1990）p.382参照。そのアについて、私は以前考察したが（中井1998a, 1998b, 2000, 2002pp. 519-524）、版によるアの相違に関する検討等が不十分であった。その後「新版」も出たので、改めて包括的に考察する。

2. 諸 版

本書には以下の4種の版がある。

- (1) 略称：55版 牧村史陽編 1955 『大阪方言事典』 杉本書店

約5,400項目。（項目数は概数。見出しだけでなく、少数ながら本文中の
ア記載語彙とを併せて集計したため。以下同様）

- (2) 略称：79版 牧村史陽編 1979 『大阪ことば事典』 講談社

上記55版に比べて約1,000項目増補／26項目削除。大幅な改訂版。削除
項目は差別語・不快語の類が多い。

- (3) 略称：84版 牧村史陽編 1984 『大阪ことば事典』 講談社学術文庫
項目は79版に同じだが、内容の細部に若干の変更がある。講談社学術文庫編集部「学術文庫版の刊行にあたって」に見える「昭和五十四[1979]年に小社より刊行した『大阪ことば事典』を、そのままの内容で縮刷し、学術文庫に収録」は、正確ではない。本稿の引用は1995年第19刷による。
- (4) 略称：04版 牧村史陽編 2004 『新版大阪ことば事典』 講談社
内容は79・84版にほぼ同じだが、やはり内容の細部に若干の変更がある。

以上の4種のうち、(1)55版は、牧村氏の「例言」によると「一切のものを一人で取り賄はねばならなかった」とあるから、氏の単著であり、ア記号も氏の内省によるのだろう。

それに対して(2)～(4)は成立が複雑である。(2)79版の刊行直前に牧村氏は逝去された。そして、(3)84版はしがきの後と(4)04版奥付の前頁に、各々、講談社編集部による注として「東使英夫氏のお力添えを得た」と記されている。(2)79版はこの注を欠く。

東使氏は御著書『初代桂春団治落語集』(2004、講談社)記載の略歴によると1933生。牧村氏(1898生)とほぼ一世代離れている。

本稿では、55年版所収で後の版でアが変更されている項目(3節)、各版のアの中央式諸アにおける位置づけ(4節)について述べる。

3. 55年版所収で、後の版でアクセントが変更されている項目

3.1 促音を含む音節に核がある場合の音調

促音を含む音節に核がある場合、55版では、促音にも、必ず、音調記号が振られている。それに対して、79版以降では、促音には高低の音調記号は振られず、空欄となっており、その前の拍(同一音節内)にのみ音調記号が振られている。促音は、伝統的な中央式諸アでは、原則としてその前の拍の高

さと同じになるから、どちらの方式をとってもほとんど問題はない。以下語例をあげる。「低」は本書の表記\をLに変更。同様に「高」の―をHに変更する。「o」は本書の無表記を示す。

	55版	79版以降	
スイッチョ	LHHL	LHoL	うまおい虫
リッシン	HHL	HoLL	じゃんけん
ヨッポド	LLLH, LLHL	LoLH, LoHL	よほど
ヨコッチョ	HHHH	HHoH	横の方

ただ、ごく稀に、促音がその前の拍の音調と高さが異なる場合がある（和田1980，中井1990）。これは以下の(a)(b) 2つのケースに限られるが、79版以降の方式ではこの表記が難しい。

(a) 音声・表層レベルでの促音

中井(1990)で述べたように、中央式諸方言において、促音には、音韻的に二つの異なるレベルのものが存在する：①通常の促音。これは、音韻レベルでも音声レベルでも、ともに「促音」として存在する。②音韻レベルで促音以外の分節音が、音声レベルでのみ「促音」として実現したもの。これは、話者にとって容易に非促音形に引き戻すことができる。

この②に、その前の拍と異なる高さの促音があらわれる。本書では以下の例が該当する。タネカッサン(種貸様・住吉大社の末社名) 55版 LLHLLL, 79版以降 LLHoLL。音韻レベルの／Lタネカ]シサン／の音調型がそのまま保たれているのだろう。他に、オッショハン55版 LHLLL, 79版以降 LoHLL もこれに該当するか(／Lオシ]ショハン／)。なお、マナガッツォ(真魚鰹)は、音韻・基底表示／Hマナガ]ツォ／かとも思われるが、55版 HHHHL, 79版以降 HHHoL である。(ここで、Lは低起上昇式、Hは高起平進式、]は核)。

促音の①②のレベル・音調の区別は、実際にはそれほど明確ではないかもしれない。タネカッサンにしても、実際には LLHHLL もあるのかもしれない。

(b) オノマトペ・副詞

オノマトペや、それに類する副詞にも、その前の拍と異なる高さの促音があらわれる。これは中央式諸方言において、個人差があって、つねに前の拍と同じ高さの人もある（中井1990、和田1980参照）が、55版では、コロット、チビット、チョビット、チョボット、チョコット、チョロット、ヒョコットのすべてがLLHLで、促音はその前の拍と高さが異なっている。79版以降はLHoLとなっている。なお、79版の追加項目にポテット LLoLがあるが、LHoLの誤記だろうか。

但し、マソット、モソット、モチョットは55版LHHL、79版以降はLHoL。これは1+3に形態素が切れるからかと思われるが、マチット（55版LLHL、79版以降はLHoL）という例外がある。これまた、音調相互の区別は、明瞭ではないかもしれない。

なお、一般論としては、促音は物理的に声帯振動がないが、前後の拍の声帯振動数との関係によって、主観的に高さを感じることが出来る。

その他、アとは直接関係がないが、四つ仮名関係の表記について、55版ではヂヅはほとんど使われず、やや乱れがあるものの、ほぼ表音式のジズで統一されている。それが、79版以降は現代仮名遣いに従ってヂヅが使われる。例：55版=コズクリ→79版以降=コヅクリ（小作り）。助詞の「を・は」は、すべての版で「ヲ・ハ」であり、表音式の「オ・ワ」ではない。

3.2 意図的かと思われる型の変更

55版記載のア型を、後の版で意図的に別の型に変えたと思われるものを列挙する。明らかな誤記（3.4参照）以外は、とりあえずここに含めた。配列は、まず拍数に分け、その内部を50音順とした。

記号の説明

- ・「=」はその前後の版で型が一致するもの。
- ・「>」はその前後の版で型の変更があったもの。

・紙幅の関係で、ア記号は、本書のものを、式（高起平進式H, 低起上昇式L）と語頭から数えた核の有無と位置（0,1,2,3...）に変更して掲げる。

・左から順に、「55・79・84・04版」のアを提示する。

たとえば、 $H1=H1>H0=H0$ は：55版H1・79版H1・84版H0・04版H0。55版と79版はH1, 84版と04版はH0で一致, 79版と84版はH1とH0で不一致。

・右端の注記の記号：

「●」は、55版のアが一般的な大阪アでない可能性が高く、79版以降に改められたアのほうが、より適切かと思われるもの。

「▲」は、55版の型も79版以降に改められたアも、ともに明治後半生の人々の大阪アとして存在し[“併存”と記載]、いわば、どちらでもよいと思われるもの。

「×」は、55版の型が明治後半生の人々の典型的なア（「古」）であり、79版以降に改められたアは、より若い世代のア（「新」）か、何らかの問題があるかと思われるア。

「？」は、明治後半生の人々の典型的な大阪ア未詳のため、判断不能の項目。

アの新古等の判断は、杉藤(1995)、池田要氏調査の京阪ア(上野[和]他2000による)、金田一春彦氏調査の京都ア(秋永他2001による)、平山編(1960)、『日本国語大辞典』、中井(2002)などを参照した。周辺の中央式諸アからの推定も含む。個々の判断の典拠・理由は省くが、浅学故の誤りも多かろう。御叱正をお願いしたい。

拍	表音式表記	意味	55・79・84・04版	私の注記
数				
2	アテ	当て. 酒肴	$H1>H0=H0=H0$	●か.H1もありうる
2	キャシャ	華奢	$H1=H1>H0=H0$	▲
2	ケン	陰. 顔相	$H1=H1>L0=L0$	▲或いはH1が古か
3	アワイ	間	$L2=L2>L0=L0$	×L0はアイサL0等の類推か

3	アンタ	貴方	H1>H1,卑L0= H1,卑L0=H1, 卑L0	▲但しL0(卑)は或いは新か。 なおH0もある。
3	オジャミ	お手玉	H1>L2=L2=L2	×H1古,L2新
3	オチン	座ること	L0=L0>L2=L2	×L0古,L2新
3	コガネ	黄金虫	L2>L0=L0=L0	? 省略語故L2が適か
3	サラエ	熊手	L0>L2=L2=L2	●か
3	シノダ	信太.狐うどん	L2=L2>H0=H0	▲併存
3	シャシャリ	味も～もない	L0=L0>L2=L2	▲古来L0,L2,H0併存
3	テッペ	天辺	H1=H1>H0=H0	▲併存
3	トーシ	通し.芝居	H1>L2=L2=L2	▲併存
3	トーシ	通し.篩	L2>H1=H1=H1	▲併存
3	ハジャヤ	葉茶屋	H2>H0=H0=H0	×H2古
3	ヒツチャ	質屋	H1=H1>H0=H0	▲併存
3	ホーカ	そうか	H0>H1[但し疑問の 意でH0]=同左=同左	×意味に関係なくH0古,H1新
3	ミナミ	南.地名	H1,H2>H1=H1=H1	×H1新
3	ヤマメ	寡夫	L0=L0>H0=H0[84,0 4版～ノギョーズイの 項L0]	▲H0古だが,老にL0も
4	アキンド	商人	H3,H0>H2,H0=H2,H 0=H2,H0	▲H3古か,但し老にH2も
4	アクタイ	悪態	H2>H0=H0=H0	▲併存
4	アンケツ	馬鹿者	H3>H1=H1=H1	? 未詳
4	アンダラ	まぬけ	L0>L3=L3=L3	▲併存か
4	イーノー	結納	L0>H0=H0=H0	●L0未詳,但しあり得る
4	イエヌシ	家主	H1>H0=H0=H0	▲併存か
3	ウメル	差し水をする	H0>L0=L0=L0	×79以降「埋」のアと同じと する。区別ありが古
4	オガクズ	大鋸屑	L2>H2=H2=H2	●H2が普通
4	オジャン	伯叔小父様	L2>H0=H0=H0	●祖父・老人のオジャンL2と 区別あり,但し「伯叔小父様」 のオジャンは語自体の使用稀か

4	カバヤキ	蒲焼	H3>H0=H0=H0	●H3もあり得るが
4	クビツリ	首吊.既制服	L3=L3>H0=H0	×この意ではL3本来か
4	ケンビキ	肩癖.筋肉名	L2>H1=H1=H1	▲併存
4	コトオー	事多.多用	H1+L0=H1+L0> H1+H1=H1+H1	? 未詳
4	コビッチョ	こましゃくれた 少女	L2>H0, L2>H1, L2=H 1, L2	? 未詳
4	コンコン	降雨の様	H1+H1 [用例はH0] =H1+H1 [用例は H0] >H0=H0	? 未詳だが普通の副詞用法なら H1+H1
4	サンウツ	非難する	L0+L0>H1+L0=H1+L 0=H1+L0	▲併存か
4	タノモシ	頼母子	H3=H3>H0>H3	×H0は「～講」より類推.04版 で復す
4	タマカラ	頭から	L0=L0>L2=L2	▲L0, H0が本来かも
4	チビクソ	極小	L3=L3>H2=H2	? 未詳
4	チャイスル	捨てる	H0>H1+H0=H1+H0=H 1+H0	▲? H0+H0も存在
4	テッペン	天辺	H1=H1>H0=H0	▲併存
4	ネチコチ	しつこい様	L0=L0>H1=H1	●H1が普通だろう
4	ハツウリ	初売	H3=H3>H0=H0	▲H0普通だがH3あり得る
4	ハナカラ	最初から	H0>H1=H1=H1	×H0古, H1新
4	ハナテン	放出.地名	L2>H1=H1=H1	? 未詳
4	ホッコリ	焼芋	H1[売声H0]>H1, H0 =H1, H0=H1, H0	? 未詳
4	ヤトイド	雇い人	H3>H0=H0=H0	×H3, L3古
4	ヤマイヌ	山犬.野犬	L0>H0=H0=H0	▲併用.79以降「病犬」L0と区別 するが「山犬」にもL0もあり
5	アカシバナ	明かし花	H0>H3=H3=H3	? 不明
5	イカレコロ	してやられた形	L0>H0=H0=H0	●但しL0もあり得る
5	イカンナン	行かねばならぬ	H1>H2=H2=H2	▲併存
5	ウワツパリ	上張.衣	L0=L0>H0=H0	●L0もあり得る

5	エンバント	生憎	$L2 > \$ H2 = \$ H2 = \$ H2$	
5	カツオブシ	鯉節	$H3 > H0 = H0 = H0$	×H3古, H0新
5	シーモッテ	しながら	$H3 = H3 > H0 = H0$	▲H0優勢だが, 京都市静原等に シーモテH3等あり. cf. 本書 別項モッテHHL
5	シミオトシ	染落	$H0 = H0 > H3 = H3$	×H0古
5	ヒノクルマ	火の車. 家計	$H1 = H1 > L0 + H0 = L0$ +H0	×H1古
5	ヒルヒナカ	昼日中	$H3, H1 + H1 = H3, H1 + H1$ $> H3, H1 + H0 = H3, H1 + H0$	▲併存か
6	アカマイダリ	赤前垂	$L0 > L5 = L5 = L5$	×L0古
6	アカマイダレ	赤前垂	$L0 > L5 = L5 = L5$	×L0古
6	アワシマハン	淡島様. 神名	$L2 > H0 = H0 = H0$	▲未詳, 但し共にありそう
6	オーツモゴリ	大晦日	$H5 > H3 = H3 = H3$	×H5, H2, H1古. H3新
6	カンコクサイ	紙子臭い	$L4 > L4, L5 = L4, L5 = L$ 4, L5	▲併存
6	トーカエビス	十日戎	$L4 > H4 = H4 = H4$	▲併存だが, L4京都老で優勢
6	トーカエベス	十日戎	$L4 > H4 = H4 = H4$	▲併存だが, L4京都老で優勢
6	ネドイハドイ	根間葉間	$L2 + H1 > L4 = L4 = L4$	▲ともにあり得る
6	ハヤイハナシ	早い話	$H1 + H1 > L4 = L4 = L4$	×L4は誤植?
6	ヒッチラカス	引散らかす	$H0 = H0 > H5 = H5$	×H5は誤植?
7	シンニューカケル	辻掛ける	$L0 + L0 = L0 + L0 > H1 + L$ $0 = H1 + L0$? 未詳
7	テシオニカケル	手塩に掛ける	$H0 + L0 = H0 + L0 > H0 + H$ $1 = H0 + H1$	▲擬古的アに変更
8	アブラカゲゾー	油掛地藏	$L6 > H6 = H6 = H6$? 未詳, ともにありうる

上に掲げた語について, 「●▲×?」の分類ごとに項目数を数えると, 以下のようになる。●(79版以降の改訂アが適切) 9項目, ▲(55版も改訂後のアも, どちらでもよい) 30項目, ×(明治生の大阪アとしては55版が適切か) 19項目, ?(不明) 14項目。

これらの変更は、下の4節で述べるような、中近世以降の中央式諸アで見られた規則的な変化に関するものはごく少なく、個別の語彙的な変化が多い。

変更時期は、79版がもっとも多く、84版がそれに次ぎ、04版は1例のみである。

55版>79版=84版=04版	43項目
55版=79版>84版=04版	25項目
55版=79版>84版>04版	1項目
55版>79版>84版=04版	1項目

3.3 音調型の誤記誤植

いずれかの版に、大阪アの音調型として存在しえないア（\$を付けたもの）が記載されている項目を示す。単純な誤記誤植によるものだろう。ここではまた「高」H,「低」Lの記号を採用する。

2	ネソ	むつつり屋	LF>\$HF=\$HF=\$HF	*HF不可
3	テンビ	天火	LHL>LHL,\$LHF=LHL, \$LHF=LHL,\$LHF	*LHF不可
3	キンギョ	金魚[舞子]	HLL>\$HLLL=\$HLLL=\$HLLL	*HLLLはギとヨを誤分割
4	オチョーズ	御手水	LHLL>\$oHLL=\$oHLL=\$oHLL	*オ部分の音調脱落
4	ニチャニチャ	ねばねば	\$LLHLH[チャ別々に] =LLLH=LLLH=LLLH	*LLHLHはチとヤを誤分割
6	ヒツツキムシ	引付虫	LLLHLL=LoLHLL>\$LoLHLH =\$LoLHLH	*LoLHLH不可
6	ヒツパリダコ	引張り蛸	\$LLLLHH=LoLLHH=LoLLHL =LoLLHL	*LLLLHH不可
7	マイマイコンコ	(きりきり舞い)	\$LLHHLLL=\$LLHHLLL =\$LLHHLLL=\$LLHHLLL	*全版不可だが、オノマト ペの特例で有り得るか
4	カイクレ	皆目	LLLH>カイクレニ\$LLLHH =カイクレニ\$LLLHH =カイクレニ\$LLLHH	*LLLHH通常不可。助詞付 き項目に変更の際の誤り か

5	ナントナシ	何と無し	LLLHL>ナントナシ=\$LLLHLH =ナントナシ=\$LLLHLH =ナントナシ=\$LLLHLH	*ナントナシ=LLLHLH通常不可, LLLHLLが適。同上
3	ムショー	この上なく	HLL>ムショー=\$HLLH =ムショー=\$HLLH =ムショー=\$HLLH	*ムショー=\$HLLH助詞強調なら 可だが通常不可, HLLL が適。同上
5	ノーノー	のんびり	HLLL>\$HLLLH/ーノート> \$HLLLH/ーノート> \$HLLLH/ーノート	*ノーノートHLLLH助詞強調なら 可能だが通常不可, HLLLL が適。同上
4	コロント	組んずほぐれつ	コロントコロントLLLHLLL>\$LLLH, HLLL=\$LLLH,HLLL =\$LLLH,HLLL	*1単位見出しのコロントコロ ントを2単位に誤分 割し, アも新たに付けて しまった

各版の単純誤記と思われる項目数は以下のようなものである：55版2項目，79版10項目，84版12項目，04版12項目。

その他，全版記載で，一応音調型の面ではありえなくはないが，誤りの可能性が高い項目がある：

3 ヒョーシ 拍子 4版ともHHH ×例文が「～の」付きのためそれをそのまま使ったか。

単独ではHLL(HHL出自)だろう

13 ニガムシカミツブシタヨーナ 苦虫噛みつぶした様な 4版ともLHLLHHHLLHLL 複合動詞のア規則からして恐らくLHLLLHLLLHLLだろう。

3.4 記号上の変更

実質的なアの変更ではなく，記号上の変更とみられるものに，以下の項目がある。

a) 「1拍語」：他項目では2拍で表示されているが，55版でこの項目のみ1拍Fで表記

1 イ 胃 HL,F>HL=HL=HL

b) L0型接頭辞は，後続語の式によりLH・LL両方が現れるが，そのいずれ

を採るか

2 マー 真.接頭 LH>LL=LL=LL

c) 2 単位以上の項目で、大幅な下降の後の、第 2 単位における上昇の表記の有無。上昇が無表記だと、型（特に式）が不明になることがある（&の項目）。

55版に上昇無表記が多く、後の版では上昇を表記するが多いが、後の版も徹底しているわけではない。逆に、後の版で無表記に転じている項目もある。

4 ゴマスル 胡麻搗る &HHLL>HHLH=HHLH=HHLH

4 ケツフク 尻拭く &HLLL>HLHH=HLHH=HLHH

5 アブラトル 油取る.怠 &HLLLL>HLLLH=HLLLH=HLLLH

5 カマカケル 鎌掛ける &LHLLL>LHLLH=LHLLH=LHLLH

6 キズカイナイ 気遣無い HLLLLH>&HLLLLL=&HLLLLL=&HLLLLL

4. 55版とそれ以後の版のアクセントの性格

—中央式諸アにおける位置づけを中心に—

中井(1998,2000,2002)では、79版に基づき、その全項目のアをまとめて、中央式諸アにおける位置付けの観点から検討した。ここでは、55版のアと、79以降の追加項目(以下たんに「追加項目」)とそのアに分け、再度、この観点から述べる。

取り上げるのは、①昇核現象(1)－3 拍体言のH2型の残存－、②昇核現象(2)－4 拍漢語のH3型－、③昇核現象(3)－2 拍の数字+2 拍助数詞－、④後部要素が3 拍の複合名詞のア、⑤動詞、⑥形容詞である。

結論から言えば、中井(2002)で指摘したように、55版のアは、すでに、これらの点については最新の段階に近い。初期落語 S P レコードの大阪アなどに比べると非常に新しいのである。そのため、共通語の影響などが強くなる世代まで下がれば別であるが、多少年下の人でも、アに大きな相違はない。牧村氏と増補者のアについても同様である。

以下、次のような記号を用いる。

- o 全版[4 種の版をまとめてこう呼ぶ]にあり、かつ全版で同じア

- x 79以降の版の追加項目
- d 全版にあるが、79版以降にアが変更されたもの

4.1 昇核現象(1)—3拍体言のH2型—

3拍体言のH2型の残存については、中井(2002)の以下の記述が、55版・追加項目両方のアにあてはまる。「H2を保存している語は少ない。比較的H2が残りやすいといわれる2+1の複合語も、京都ほどではないが、かなり変化をおこしている。なお、下記Vにあげた「～時」はL2に変化しているが、京都ではこの語については老年層でH2の古形が残っているので、牧村氏のほうが、変化が進んでいる。4拍語の短縮は、古形が多少残りやすいようである。これは、下記のように、4拍語でH3→H2への変化はおこっているが、H1にまでは変化していないから、そのH2のアを保存したまま3拍に短縮したのだろう。

但し、追加項目は少ないので断定的なことが言い難いが、「1+2」の複合語にH2型が現れる(マヒゲ・ユアギ・ユアゲ)から、かえって、この点では、かりに追加項目のア記入者が牧村氏以外であったなら、かえってそのほうが古形を多めに残している可能性がある。

・H2を保存する語は以下のようなものである

I 単純語		=H1)	III 1+2の複合語
x オナゴ	女		x マヒゲ 眉毛
x オンナ	女	II 2+1の複合語	x ユアギ 湯上タオル
o シメシ	示し(～がつかぬ)	o アイコ 相子(H0も)	x ユアゲ ”
o ハナシ	話(～にならん、ハナシ単独の見出しはH1)	x オナゴ 女子	
		o ソレシャ 其れ者	IV 4拍語の短縮
		x ウチシュ 内衆	o ゴンゴ 五合
		o ヒトヨ 単衣	x スンポ 寸法
		o ミズシ 水仕	o ナコド 仲人
d ミナミ	南([地名]. H1, H2>H1=H1)	o ヤマケ 山気	o ヌスト 盗人
			o ハンブ 半分

・ H 2 を保存しない語は以下のようなものである。(注記するもの以外H1型)

I 単純語		o ナレコ	馴れこ	o トリコ	取粉
d アンタ	貴方 [79版以降 降卑でL0も]	o ニヨイ	匂い	o ナカイ	仲居
o アタマ	頭。～張る	o ハカマ	袴 (徳利用)	o ナカド	中戸
o アツケ	暑気	o ハシリ	走り(流し)	o ナカマ	仲間
o イカキ	筈	o ハナシ	嘶	o フロバ	風呂場
o オクビ	衿	o ヒガン	彼岸	o フロヤ	風呂屋
o オトシ	落し (落語の 下げ)	o フスマ	襖	o ホシナ	干菜
o オモテ	表(店の間)	o ベント	弁当	III 1 + 2 の複合語	
o キビス	踵	o マータ	真綿	o コイビ	小指
o カーラ	瓦	o マーリ	回・廻・周	o テスリ	手摺
o カシラ	首 (人形の頭)	o ミシロ	筵	o マナカ	間中
o グワイ	具合、	o モヨギ	萌葱	o イマキ・ユマキ	湯巻
o コグリ	潜り戸	o ユハイ	位牌	IV 4 拍語の短縮	
o サーラ	さわら (魚名)	II 2 + 1 の複合語		x アイソ	愛想
o ササラ	簾	o イロヤ	色屋	o ジューノ	十能 (道具)
o シブキ	しぶき	o ウエメ	植女	o セーロ	蒸籠
x ダイジ	大事	o オチマ	落間	V その他(時刻)	
o ツクリ	作り (刺身)	o オチメ	落日	o イチジ	一時 L2
o テラシ	照らし (遊女)	o オニバ	鬼齒	o ハチジ	八時 L2
d トーシ	篩 (55版L2)	o カラト	唐櫃	o ヒチジ	七時 L2
d トーシ	通し (79版以 降L2)	o キリド	切戸	o ロクジ	六時 L2
o ナマス	膾	o サブケ	寒気		
o ナマズ	(皮膚の痣)	o シオヤ	塩屋 (口入屋)		
		o ツマド	妻戸		
		x トーヤ	当屋		

4.2 昇核現象(2)— 4 拍漢語の H3 型—

4 拍漢語のH3型について (数字+助数詞は次項)。該当の20語のうち, 19語

は、4種すべての版に同じアで掲載されている。1語だけが79版で追加：「マンザイ漫才H2(84版,04版もH2)」, この1語が特異な振る舞いをするものではない。全体の挙例を略す。中井(2002)p.521参照。語末が非特殊拍のもの(例：ドーラク道楽 H3)のみH3を維持, それ以外はすべて変化が完了してしまっていて, 55版・追加項目ともに, 新しい段階にある。但し, 変化後はH2で留まっている語が多く(例：アンバイ塩梅 H2), ほとんどH1にまでは変化していない。H1への変化例は, 第2拍が促音でH1とH2の対立がないもの(例：テッタイ手伝 H1)を除くと, ハンビツの1例のみである。京都などでは, 老年層でもかなりH1への変化が進んでいるから, それよりは古形が残っていると言える。

4.3 昇核現象(3)—2拍の数字+2拍助数詞—

該当8項目すべてが, 全版に同じアで掲載されている。挙例を略す。中井(2002)p.522参照。上記②と同じく, 語末非特殊拍のみH3を維持(例：シンガツ四月 H3), それ以外は変化(例：ハッポー八方 H1), という中央式の中で新しい段階にある。

4.4 後部要素が3拍の複合名詞のア

中井(2002)でも扱ったが, 今回改めて, 後部要素が3拍の複合名詞のアを, より詳細に検討する。扱うのは, 5～7拍体言で2+3, 3+3, 4+3という語構成の語である。但し, 2文節・ア上完全な2単位になるもの；「動詞連用形+動詞」の複合動詞から連用形派生名詞(すべて無核)は除外する。

後部要素が3拍の複合名詞は, 新しいタイプの中央式諸アでは-3型になるのが原則である(一部無核も)。それに対して, 古いタイプの中央式では, -4型・-2型などがかなり現れる。どちらのタイプでも, -5型も散発的に現れる。

以下, 型別の項目数をあげる。語例は-3型・無核型は1語のみ, それ以

外の型（★を付す）は該当語例をすべて列挙する。なお，！を付けた語は，中井(2002)で，例外的アとして挙げるべきなのに脱落していたもの（形態素境界の切り忘れ，複数型併用の場合の処理の誤りなどが原因）。

a)55版項目（全版変更なし）

5 拍2+3の複合語

型	項目数	読み	漢字表記
H3	63	フクシラガ	福白髪
L3	25	ナベツカミ	鍋掴み
H0	13	ホンマツリ	本祭
L0	3	ウロオボエ	空覚え
H3,H0	1	カタイツポ	片一方
H3,H2★	4	トリザカナ	取肴，
		ミーシジメ	実蜆，
		！ヒキイワイ	引き祝，
		！ミセジマイ	店仕舞
H2★	2	！ハツムカシ	初昔，
		！ハマシバイ	浜芝居
H4★	1	ゴクヌスト	穀盗人
H1★	5	アワオコシ	粟おこし，
		イワオコシ	岩おこし，
		カンザラシ	寒晒，
		シリカラゲ	尻からげ，
		ダンバシゴ	段梯子，
L2★	6	キューシバイ	旧芝居，
		シンバシラ	心柱，

ダイナゴン 大納言，

タチションベ 立小便，

チューニカイ 中二階，

チューシバイ 中芝居

L3,H2★ 1 !サカウラミ 逆恨

6 拍3+3の複合語

H4	41	アンドバカマ	行燈袴
L4	34	オトコオナゴ	男女
H4,L4	1	オトシバナシ	落し話
H4,H3★	1	！チンコシバイ	ちんこ芝居
H3★	1	オクリムカイ	送り迎い
L3★	1	ヒトツヒトツ	一つ一つ
L0+H2★	1	ハンショヌスト	半鐘盗人
L4,L3★	1	アッチャコッチャ	あちこち・反対

7 拍4+3の複合語

H5	29	カイダンバナシ	怪談噺
L5	19	テンジンマツリ	天神祭
L0	1	エーコラカゲン	良頃加減
L4★	1	イチニチハダメ	一日おき

b)79版以降の削除項目(3項目のみ)：いずれも－3型である。

パンガーラ 煉瓦 H3，チューオイチバ 中央市場 L4，ハッピークヤキョー 八百八橋 H5

c)79版以降の変更項目（4項目のみ）：いずれも－3型または無核型。既出だ

が再掲示する。

- | | | | | |
|---|--------|-----|----------------------|--|
| 5 | シミオトシ | 染落 | $H0=H0>H3=H3$ | $\times H0$ 古 |
| 5 | ヒルヒナカ | 昼日中 | $H3, H1+H1=H3, H1+H$ | ▲ $H1+H1$ より $H1+H0H3$ が一般的
$1>H3, H1+H0=H3, H1+H0$ |
| 6 | トーカエビス | 十日戎 | $L4>H4=H4=H4$ | ▲.L4老で優勢 |
| 6 | トーカエベス | 十日戎 | $L4>H4=H4=H4$ | ▲.L4老で優勢 |

d)79版以降の追加項目

5 拍2+3の複合語	L4 3 ヤマイブクロ 病袋
H3 18 キーヤマイ 気病	L3★ 1 カタミウラミ 互恨み
L3 9 シロネズミ 白鼠	7 拍4+3の複合語
L0 4 アカゴハン 赤御飯	H5 7 キミシリナスビ 木筆り茄子
6 拍3+3の複合語	L5 1 コージンボーキ 荒神箒
H4 10 ツツミセンベ 包み煎餅	

中井(2002)でも述べたように、ほとんど-3型で統一されているが、少数ながら例外がある。そして、例外は、79版以降の追加項目に少ないと言えるかもしれない。

これらの例外の多くは何らかの説明がつく。該当語をあげる。

a) 5 拍H1(-5)型：4 拍H1型との併用で、そのアを保存したものが目立つ：

アワオコシ 栗おこしH1	ダンバシゴ 段梯子H1 [ダンバシH1]
イワオコシ 岩おこしH1 [イワコシH1]	

b)-4型：4 拍H1型との併用で、そのアを生かしたものか：

ミーシジメ 実蜆 H3,H2 [ミシジメ記載ないが京都老でH1]

c)-4型：特定の接頭辞：

ダイナゴン 大納言(小豆) L2	チューニカイ 中二階 L2
チューシバイ 中芝居 L2	

d)-4型：反意語的な要素：

アッチコッチ あっちこっち L3	オクリムカイ 送り迎え H3
------------------	----------------

e) -2型：後部が4拍H3型の短縮形：

ゴクヌスト 穀盗人 H4 | ハンショ+ヌスト 半鐘盗人(背高) L0+H2

しかし、以下の11語は説明がつきにくい。そして、これらは-4型である。そういった点では、多少なりとも上野他編(2000)記載の池田要氏報告のAに近いと言えるかもしれない(cf.中井)。しかしながら、-3型が全版を通して圧倒的に優勢であって、-4型はごく少数現れるだけである。語末の3拍の母音の広狭が「狭広狭」が多いのに興味を持たれる。

タチクラミ	立眩み	L2	ミセジマイ	店仕舞い	H3,H2
タチションベ	立小便	L2	チンコシバイ	ちんこ芝居	H4,H3
トリザカナ	取肴	H3,H2	ヒキイワイ	引き祝	H3,H2
カタミウラミ	互恨み	L3	ハツムカシ	初昔	H2
イチニチハダメ	一日はだめ	L4	サカウラミ	逆恨み	L3,H2
ハマシバイ	浜芝居	H2			

4.5 動 詞

(1)3拍1段2類の基本形, (2)3拍5段2類の基本形, (3)2拍5段2類の否定形, (4)3拍1段2類の否定形, (5)3拍5段2類の否定形, (6)2拍5段2類のタ・テ形について述べる。

(1)(2) 3拍1段2類・3拍5段2類の基本形は、古形のH1はほとんど皆無で、ほぼすべて新形のL0・H0型になっている。わずかに慣用句内に3例古形がみられる。下例のうち、「手塩に掛ける」のAはあえて擬古的Aを復元したのだろう。

d テシオニカケル	手塩に掛ける	$H0+L0=H0+L0>H0+H1=H0+H1$
o サルモキカラオチル	猿も木から落ちる	$L2+L0+H1$
o ナルホドチギルアキナスビ	生るほどちぎる秋茄子	$L0+H1+H3$

(3)(4) 2拍5段2類, 3拍1段2類の否定形

これまた古形のH1は慣用句にいくつか見られるだけである。

2 拍 5 段 2 類

- o テーニ+アワン L0+H1 手に合わぬ
- o テコニ+アワン H1+H1 艇に合わぬ
- o カナン H1叶わない
- o スカン H1好かない
- x セーテ+セカン L0+H1 急いて急かん
- o ドム+ナラン H1+H1 どうもならぬ
- o ドモ+ナラン H1+H1 どうもならぬ

o ドン+ナラン H1+H1 どうもならぬ

o ハナシニ+ナラン H2+H1 話にならん

o モチモ+サゲモ L2+H1+H1 持ちも提げ
+ナラン もならぬ

3 拍 1 段 2 類

x キッテモ+キレン L3+H1 切っても切れん

(5) 3 拍 5 段 2 類の否定形

古形のH2は 2 例のみである。

- o ニツカン H2,H0 似付かぬ
- x オシマヌ+オシマヌ H2+H2 惜しまぬ惜しまぬ

以上、(1)～(5)で、2 拍 5 段 2 類動詞、3 拍 1 段 2 類動詞、3 拍 5 段 2 類動詞の 3 者の変化を見た。3 拍 5 段 2 類の変化が、基本形・否定形ともに最も進んでおり、2 拍 5 段 2 類動詞の否定形がもっとも遅れる。

(6) 2 拍 5 段 2 類動詞のタ形は語例が少ない。わずかに「o オータ L0 負うた、オータ L0 会うた」の 2 例が新形のL0で出ている。

他に「o オッタ L3F 落った」があり、一見古形であるが、特例だろう。即ち、「落ちる」は、2 拍 5 段 2 類と 3 拍 1 段 2 類との中間的な活用をする(例えば基本形はオツではなくオチル)。そして、3 拍 1 段 2 類のタ形のAはオチタL2であるから、それからの類推によるかもしれないのである。

2 拍 5 段動詞のテ形は、現在の近畿中央部ではL0が圧倒的に優勢で、周辺部でL3・L2が現れることが多い。本書ではテ形の語例自体が少ないが、サイテ(下記)について、追加項目はL3、全版項目はL0のように見える。かえって79版以降のほうが例外的Aになっている。

x サイト	項目なし>LLF=LLF=LLF	差すの音便;助詞的
o ソコイサイト	4 版ともLHLLLL	其処へ

4.6 形容詞

全版とも非常に新しい段階にあり，版による差はない。念のため中井(2002)の記述を再掲する。基本形3拍以上で，-3型の例外となるのは以下のとおりである。o ヨロシー（宜しい），o オーケー・オーキー（大）・o チーチャイ（小）が，全版でH1.このうち，「ヨロシー(宜しい)」は，ヨロシという短い形も使われることが，また「オーケー・オーキー・チーチャイ」は，第2拍の長音が関係するか。これらは，初期落語SPではH2だが，現代の京阪でH1が優勢である。牧村氏のアは新形になっている。他にo ダイナイ（大事な）がHLLLだが，H1+L0だろう。

低起式の場合，核の位置が-2のものがあるが，ある種のイントネーションが固定したものがほとんどである：o サルガシコイ（猿賢い）L5.

4.7 追加項目の単純誤記・誤植

以下は，音調型が存在しえないと思われるもの・アの欠落があるものである。

3 キザラ	木皿	項目なし>\$HLH=\$HLH=\$HLH
4 ボテット	ぼてっと	項目なし>\$LLoL=\$LLoL=\$LLoL
5 ギーコンコ	舟	項目なし>\$HoLLL=\$HoLLL=\$HoLLL
5 ネーハヤス	根を生やす	項目なし>\$LHHHH=\$LHHHH-\$LHHHH
3 ゼンザ	前座	項目なし>ア欠=ア欠=ア欠
4 セチガウ	逆らう	項目なし>ア欠=ア欠=ア欠

以下は，大阪アの音調型としては存在するが，誤りの可能性があるものである。

4 ニッパチ	二(月)八(月)	項目なし>LoHL=LoHL=LoHL*LLLHかも
5 ショコトナイ	仕方がない	項目なし>HLLLL=HLLLL=HLLLL *HHHLHなどか
6 シタカラハウ	下から這う	項目なし>\$LLLLLH=\$LLLLLH=\$LLLLLH *HHHHLHか

- 7 ナンチューヤッチャ 何という奴だ 項目なし>HLLLHoL=HLLLHoL=HLLLHoL *LHLLHoLかLLLLHoLか
 7 ジューニントハラ 十人十腹 項目なし>HLLLHHH=HLLLHHH=HLLLHHH *HLLLHHHか
 8 ザマミドノマエ 座摩御堂の前 項目なし>LFHHHHLH=LFHHHHLH=LFHHHHLH *LFHHHHLFか
 8 ニンナシバケジュー 人無化十 項目なし>\$HLLLLLLH=\$HLLLLLLH=\$HLLLLLLH *LLLHLLLHか

まとめ

本稿で報告した事柄を纏めておく。

①『大阪ことば事典』(『大阪方言事典』)の、1955年版(約5,400項目)、1979年版(大幅な増補改訂。約1,000項目増加。削除項目僅少)、1984年版・2004年版(79年版に近いが小改訂あり)の、4種の版のAにつき、検討した。

②1955年版と1979年以降の版とを比べると、促音を含む音節に核がある場合の音調表記が異なる。

③4種の版すべてに掲載されており、かつ、1979年以降の版で、A型が意図的に変更されたかと思われるものは少ない(70項目)。変更は様々だが、後の版のほうがわずかに新しいAが目立つ。但し、下記④に述べる、中近世以降の中央式諸Aで起こった規則的な変化に関するものはごく少なく、個別の語彙的な変化によるものが多い。

④中央式諸Aの変遷過程における位置づけは以下のとおり。(ア)3拍・4拍の昇核現象、(イ)後部要素3拍の複合名詞；(ウ)3拍5段2類動詞基本形・否定形、3拍1段2類基本形、2拍5段2類否定形・テ形、(エ)形容詞基本形のAについて、ほとんど版による差がなく、中央式諸方言のほぼ最新の段階にある。但し、(イ)は1955年版から掲載のAに古形がわずかに目立つ。(ウ)については1979年以降の版に擬古的Aと思われるものがわずかにある。

⑤版によるAの相違は大きくなく、全体としてみれば、本書は、(初期落語SPレコードと比較して)それほど古風ではないが、共通語の影響を強く受ける前の大阪Aを記載した、すぐれた資料である。

引用文献

- 上野和昭・秋永一枝・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編2000『池田要 京都・大阪アクセント資料五十音順索引』アクセント史資料研究会
- 秋永一枝・松永修一2001『金田一春彦調査 京都アクセント転記本（榎垣実京都アクセント記入）』CODRM アクセント史資料研究会
- 真田信治 1990「近畿地方の方言研究」『日本方言研究の歩み－論文編－』角川書店
- 杉藤美代子 1995,1996『大阪・東京アクセント音声辞典』丸善
- 中井幸比古 1990「アクセント核の担い手について」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 1998a「アクセントの調査法」『日本語学』1998 9月号
- 1998b『初期落語 SP レコードの大阪アクセント』金沢裕之編 科研報告書
- 2000『大阪アクセントの史的変遷』科研報告書
- 2002『京阪系アクセント辞典』『同 データCDROM』勉誠出版
- 平山輝男編 1960『全国アクセント辞典』東京堂出版
- 和田 實 1980「関西弁における母音の音訛」『音声の研究』19
- 1984[1979執筆]「方言辞典」『講座方言学2 方言研究法』国書刊行会